様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１２６６

研究課題名（和文）琉球沖永良部語を中心とした地域言語コミュニティ参加型の消滅危機言語復興研究

研究課題名（英文）Community Based Approach for Language Revitalization: Case Studies on Okinoerabu and Other Ryukyuan Languages

研究代表者
山田　真寛（Yamada, Masahiro）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・准教授

研究者番号：１０７３４６２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　15,260,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間を通して知名町（沖永良部島）と連携して知名町中央公民館講座を開講し、沖永良部語の記録保存ができる市民科学者を育成した。講座受講者が調査実習で収集した島内諸方言の語彙データを音声付きオンライン辞書として公開した。さらにアウトカムとして、受講者が自主的に調査チーム・編集チームを立ち上げて、方言辞典の制作を開始した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
言語記録トレーニングを提供することで地域言語コミュニティメンバーがじぶんたちの手でじぶんたちの方言を記録することができるようになったことは、学術的にも社会的にも意義がある。地域言語コミュニティと協働して行う記録保存・継承保存の先駆的な事例であり、国内の消滅危機言語研究の発展に貢献する成果である。

研究成果の概要（英文）：Throughout the research period, we offered a course at the China Town Central Community Center in collaboration with China Town (Okinoerabu Island) to raise citizen scientists who are capable of documenting their own dialects. Vocabulary data for various dialects collected by course participants during research training sessions has been published as an online dictionary with audio. Furthermore, as an outcome, some participants independently established a research team and an editorial team and began collecting data for a dictionary of their dialects.

研究分野：言語復興

キーワード：言語復興　消滅危機言語　琉球語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1-1　背景：消滅危機言語の記述と記録保存は進んでいるが、継承保存は遅れている

UNESCO は 2009 年にアイヌ語、八丈語、六つの琉球諸語を日本国内の消滅危機言語として報告し（Moesley 2009, 2010）、この頃から琉球諸語の体系的な記述が行われてきた。琉球諸語はその下位分類（方言）も含めて互いに大きく異なる言語群であり、Shimoji (2008), Pellard (2009) 以降多くの参照文法が博士論文として執筆されているほか、国立国語研究所の危機言語・方言プロジェクトを中心に、語彙・談話資料・文法概説の蓄積が行われている。これらは言語が消滅した後にもその全体像を理解するための記述・記録を主な目的としているが、言語記述・記録の蓄積を利用した言語を次世代に残す継承保存のための研究はじゅうぶんに行われているとは言えない。継承保存の取り組みは、対象とする言語のじゅうぶんな理解を土台としないものや、単発型のイベントや研究者による一方的なコンテンツ制作が中心で、持続可能な消滅危機言語の継承保存を行うための研究が行われているとは言えない。

1-2　背景：沖永良部語の継承保存、再活性化は不可能ではない

流暢な話者がおおむね 70 歳以上である琉球諸語の現状を考慮すれば、言語の記述が喫緊の課題であることは明白である。しかし研究代表者および研究分担者の横山が中心となって行った地域言語の理解度を測定する研究（Yamada et al. to appear）は、少なくとも沖永良部島で生まれ育った 40 歳前後までは、地域言語を理解する受動的言語能力（passive linguistic ability）を流暢な話者と同程度持つ「潜在話者」であることを明らかにした（図 1）。彼らは言語獲得期にある子どもを育てている「親の世代（UNESCO 2003）」であり、彼らの受動的言語能力を能動化する（activate）ことで「子の世代（UNESCO 2003）」への地域言語インプットを増加させ、消滅危機言語を再活性化する（revitalize）ことは、じゅうぶん可能であると考えられる（横山，冨岡．2019）。

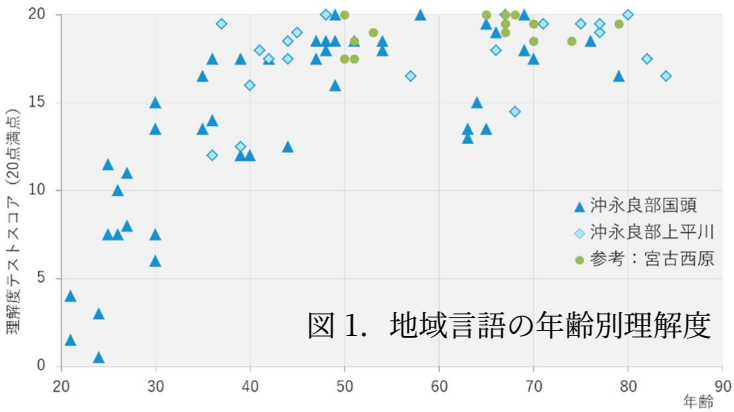

図 1．地域言語の年齢別理解度

1-3　背景：行政との連携協力協定にもとづく研究実施基盤が形成されている

本研究の前身となる研究代表者および研究分担者が 2015 年から行ってきた研究では、地域言語コミュニティメンバーが当事者として言語の保存に参画する「言語復興の港」プロジェクトを進めている。その一環としての地域言語絵本の制作・利用や、家庭ごとに三世代で取り組む言語継承活動のしくみづくりなど、個人・家庭と研究者のさまざまな協働プロジェクトが認められ、2018 年度に沖永良部島和泊町・知名町と研究代表者が所属する国立国語研究所が、地域言語の保存に関する連携協定を締結した。これを受けて 2019 年度には研究代表者を講師として、辞書データの収集・管理を行う市民講座（1 回 2 時間月 2 回、継続中）や、役場職員を中心とした地域言語研修会シリーズ（10 月までに 7 回実施、継続中）などが行われている。両町の町長が協定締結時に明言したとおり「沖永良部島を言語復興のモデルケース」とする意識が着実に醸成されており、本研究を実践するための基盤が形成されている。

２．研究の目的

2-1　目的：コミュニティ主体の持続可能な言語復興、消滅危機言語復興の共有知

上述の背景を受け本研究は、言語の記録と継承に必要な地域言語コンテンツの制作を、沖永良部語コミュニティと研究者が協働して進める。そして、この過程で必要なトレーニングを研究者が地域言語コミュニティに提供することで、地域言語コミュニティ内で、コミュニティ自身の手で行う持続可能な言語復興の基盤を構築し、消滅危機言語の再活性化という社会課題の解決を目的とする。また沖永良部島をモデルケースとし、研究分担者が言語記述のフィールドワークを行っている他地域に沖永良部島の事例を応用する。これによって異なる言語コミュニティでの個別プロジェクト成否要因を具体的な背景や事例とともに蓄積し、消滅危機言語復興研究の共有知を抽出することも目的とする。

３．研究の方法

2-2-1　独自性：ボトムアップとトップダウンの実質的な取り組みをすでに行っている

本研究の独自性は、まずその準備状況が確固たるものであることがあげられる。研究代表者・分担者らの「言語復興の港」プロジェクトが 2015 年から行っている地域言語コミュニティ内の個人や家庭との協働のような草の根的な取り組み(grassroots activity)に加えて、2018 年度に締結した沖永良部島両町と国立国語研究所の連携協定にもとづいた、実質をともなうトップダウンの取り組みが行われている。散発的な個別の取り組みではなく、コミュニティ主体の持続可能性を志向した言語復興が、研究代表者らを触媒として試験的ながらも実践されており、実現可能性がじゅうぶんある実践研究である。

2-2-2　独自性：コミュニティエンパワーメント

さらに本研究では前身研究から一貫して、地域言語コミュニティとの協働をとおして、将来的には地域言語コミュニティが自分たちの手で持続可能な言語復興を行うことを目的としている。単発型のイベントや研究者が一方的に制作する地域言語コンテンツは、地域言語コミュニティが言語復興に対する興味を持つきっかけにはなるが、それだけでは言語復興に不可欠な言語コミュニティの主体的かつ持続可能な取り組みには至らない。先述のように本研究は、地域言語コンテンツの制作・利用や継続的なイベントを、言語復興におけるコミュニティエンパワーメントの手段として用いてこれを解決する。

2-3　創造性：記録保存と継承保存を並行して行うこと、コミュニティとの協働

本研究は、従来のように消滅危機言語の記述、記録保存と継承保存を切り離さず、これらを並行して行うことが可能であるだけでなく最適であることを示すことがあげられる。消滅危機言語の記述・記録資料を残すことも、話者に内在する生きた言語を次世代に継承し、言語の多様性を保持することも、喫緊の課題であることは言うまでもない。また辞書や談話資料など大量のデータを扱う言語の記録保存の多くは、研究者だけでなく地域言語コミュニティメンバーと協働して行う方が効率的であり、かつ地域言語の継承・（再）習得にとっても効果的である。つまり、学術研究成果の社会還元・アウトリーチという一方的な行為ではなく、研究者・地域社会の両者にとって有益な消滅危機言語研究となることが期待できる。

研究代表者らの前身研究では、2015 年度から地域言語コミュニティメンバーと協働して、言語の記録としても学習教材としても利用可能な、絵本などの地域言語コンテンツを制作している。また 2017 年度からは、家庭内の地域言語使用を促進する地域言語コンテンツ制作を三世代で行う「しまむにプロジェクト」を続けており、これまで沖永良部島の二つの小学校区を対象に 8 家族と協働してきた（山田，横山 2017, 2018）。これらの草の根的な活動（grassroots activity）

に加えて、2018 年度からは国語研と沖永良部島の和泊町・知名町が沖永良部語保存のための連携協定を締結した。2019 年度はその一環として、月 2 回（1 回 2 時間）の知名町中央公民館講座内で、約 15 名の参加者が沖永良部語諸方言の語彙と用例を収集し、毎回クラウド上のスプレッドシートに入力して研究代表者らと共有、国語研の危機言語データベースに格納して、オンライン辞書として逐次公開している。また両町の職員方言研修会（10 月後半実施予定の 2 回を含む 7 回実施、継続中）には毎回約 40 名、親子や中学生を対象としたスピンオフ回には各回約 20 名が参加しており、今後も継続する計画である。

これらの取り組みはコミュニティ内の数名のキーパーソンからの要請にこたえる形で研究代表者らが実施した、研究成果公開トークや地域言語コンテンツ利用ワークショップから始まったものも多く、イベントごとに研究協力者が増加している。つまり、研究者を消滅危機言語復興という課題解決のためのリソースやファシリテーターとして、地域言語コミュニティが当事者となって自分たちの言語復興に主体的に取り組む基盤が確立していると言える。

４．研究成果

持続可能な言語の保存に不可欠な地域言語コミュニティによる主体的な取り組みが始まったことが、本研究課題の最も大きな成果である。本報告書では主に、知名町中央公民館講座「しまむにサロン」のアウトカムとして沖永良部島の田皆集落と玉城集落のコミュニティメンバーによって始められた方言辞典制作について報告する。

4.1.1「しまむにサロン」概要

沖永良部島の知名町と国立国語研究所が 2019 年 1 月に締結した連携協力協定（2022 年 4 月に更新）にもとづき、山田と横山を講師に、研究期間を通して知名町中央公民館講座「しまむにサロン」を 2019 年 4 月から現在まで開講している。講座は市民科学者の育成をテーマに通年で毎月 1 回 2 時間開講し、毎年約 20 名が受講している（多くが翌年も受講する）。座学と実習をとおして言語の記録と継承の方法を身につけることを基本的な目的とし、受講生による講座外での活動報告や、他地域で言語の保存を行っている研究者やコミュニティメンバーを講師に招いてゲストレクチャーを行ったりしている。

講座で行う様々な活動の中に、基礎語彙調査を通した言語の記録方法の習得がある。このトピックに関して受講者は、前半の 1 時間は文法、拡張かなによる表記法と分かち書き、日本語共通語にない沖永良部語の音、調査票と音声レコーダーを用いた対面調査の方法などについての講義を受ける。後半は話者同士もしくは話者と学習者がペアになり、国語研危機言語プロジェクトが作成している基礎語彙調査票を用いて各話者の方言語彙を収集する。

山田・横山は講師として参加する他、受講生が収集した語彙データを定期的に受け取り、音声ファイルの切り出しとテキストのデータベース化を行い、危機言語プロジェクトウェブサイト上で音声付きオンライン辞書（https://kikigengo.ninjal.ac.jp/data/tango/search）として公開している。現在までに島内 9 方言の基礎語彙の一部を公開した。

2020 年度末以降コロナ渦の影響を受けてフィールドワークを行うことができなかったが、2019 年度から講師は対面と Zoom 両方で参加していたため、一度も休講することなく講座を続けることができた。受講生は公民館に集って公民館長が接続した Zoom から参加し、公民館のプロジェクタ・スピーカ・マイクを利用して講師とやり取りしている。

4.1.2.「しまむにサロン」アウトカム

上述の音声付きオンライン辞書がわかりやすいアウトプットであるが、講座によって言語の記録方法を受講生が身につけたことが最も重要な成果である。そのアウトカムとして、受講生を中

心に田皆集落と玉城集落で方言辞典制作が始められた。以下で田皆集落の事例を報告する。

4.1.3. 田皆集落の方言辞典制作

田皆集落の方言辞典制作は、60 代の受講生によって始められた。受講生は自信と同じく田皆方言の（流暢な）話者ではない友人 3 名とともに調査チームを編成し、音声データ付きで基礎語彙調査を完了させた。その後、流暢な母語話者を加えて辞典編集チームを編成し、月 2 回の編集委員会で各項目の用例収集を行っている。

特筆すべきは、受講生が他の 3 名に講座で習得した語彙調査の方法を共有したことである。田皆方言に関して「しまむにサロン」の直接の貢献は、1 名の言語コミュニティメンバーが言語を記録する技術を習得したことだが、この 1 名を介してさらに 3 名のコミュニティメンバーが言語の記録を行う人材として育成された。講座でも途中経過が報告され、今後同じような波及効果が期待できる。また方言辞典制作は、本研究プロジェクトメンバーが追調査や音声データの切り出し、データベース管理などを行い、コミュニティメンバーは地域内でしかできないことに集中するという真の協働プロジェクトとして実践されている。編集チームは「たんにゃむに（田皆ことば）サークル」として田皆公民館で報告会を行い、他地域でも同じように研究者との協働が進められることが期待できる。

4.2. その他の成果

研究期間開始年度からコロナ渦の影響を受けて研究計画の変更を余儀なくされたが、上述した「しまむにサロン」関連以外の成果を簡単に列挙する。

4.2.1. 他地域で言語の継承活動に取り組む者どうしが交流する機会を創出した

国立国語研究所が文化庁や地方自治体と毎年共催している「消滅の危機にある言語・方言サミット」において、地域言語の継承活動に取り組む者どうしが交流する場として「ブース発表」を 2022 年度の沖永良部島大会から新設した。2023 年度の与那国島大会と合わせてのべ約 20 組がポスター発表や展示、デモンストレーションなど自由な形式で取り組みを発表し、参加者どうしで情報交換を行った。

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/summit

4.2.2. 4 つの島のことばの絵本展とオーキッドバウンティ受賞

2023 年 7 月にジュンク堂書店那覇店において一か月間「みる・よむ・きく・えがく　4 つの島のことばの絵本展」を開催し、前身プロジェクトから継続している各地の昔話をもとにした地域言語絵本制作を原画展という形式で還元した。この展示を中心に本研究課題が進めている「言語復興の港」プロジェクトが評価され、ダイキン工業株式会社・琉球放送株式会社からオーキッドバウンティが授与された。

https://readyfor.jp/projects/minato/announcements/223678

https://www.daikin.co.jp/press/2023/20230228

4.2.3. 日本地域情報コンテンツ大賞 2020 自治体 PR 部門最優秀賞受賞

本研究プロジェクトが沖永良部語コンテンツを提供したおきのえらぶ島観光協会が発行する広報誌『しまらっきょ vol.5』が、日本地域情報コンテンツ大賞 2020 自治体 PR 部門最優秀賞を受賞した。審査コメントは本研究プロジェクトのコンテンツを指して「誌面から QR コードで動画に連動させ、島の方言をダイレクトに聞けるなど、その取り組みがとても面白かった」と評価している。

https://award.nicoanet.jp/past2020/tm20_04_pr/index.html

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Yokoyama Akiko	４．巻 37
２．論文標題 The interrogative intonation in the Kunigami dialect of Okinoerabu, Ryukyu	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	６．最初と最後の頁 259～274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/jjl-2021-2043	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 横山晶子	４．巻 1
２．論文標題 鹿児島県沖永良部島国頭	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本の消滅危機言語・方言の文法記述	６．最初と最後の頁 363-436
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Natsuko Nakagawa	４．巻 1
２．論文標題 Nambu (Aomori, Eastern Japanese)	５．発行年 2022年
３．雑誌名 An Introduction to the Japonic Languages: Grammatical Sketches of Japanese Dialects and Ryukyuan Languages	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中川奈津子	４．巻 2021-CH-126
２．論文標題 消滅危機言語の辞書データベースの構築と公開：「鳩間方言 音声語彙データベース」、「うちなーぐち活用辞典テキストデータベース」の事例報告	５．発行年 2021年
３．雑誌名 情報処理学会研究報告	６．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 横山晶子	4．巻 1035
2．論文標題 琉球諸語オノマトペの世界	5．発行年 2021年
3．雑誌名 早稲田文学	6．最初と最後の頁 98-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kohei Nakazawa, Akiko Yokoyama	4．巻 -
2．論文標題 Stop series in Japonic	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Studies in Asian and African Geolinguistics	6．最初と最後の頁 31-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　2件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 Kohei Nakazawa and Akiko Yokoyama
2．発表標題 Animal vocabulary in Japanese
3．学会等名 Studies in Asian and African Geolinguistics（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Kohei Nakazawa and Akiko Yokoyama
2．発表標題 Crop terms in Japanese
3．学会等名 Studies in Asian and African Geolinguistics（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Natsuko Nakagawa and Yuka Hayashi
２．発表標題 Contrastive topic =gyaa in Ikema-Nishihara Miyakoan of Southern Ryukyus
３．学会等名 Japanese/Korean Linguistics Conference 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Natsuko Nakagawa
２．発表標題 An experimental method for eliciting (zero) case-marking in spoken Japonic dialects
３．学会等名 JK pre-workshop Data-oriented approaches to meaning in Korean and Japanese（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Masahiro Yamada
２．発表標題 Panel discussion: Safeguarding and revitalizing indigenous languages in Asia for sustainable development
３．学会等名 Regional Consultation in Asia for the Preparation of the International Decade of Indigenous Languages (IDIL) 2022-2032（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 木部暢子，山田真寛
２．発表標題 消滅危機言語・方言を記録し，継承する
３．学会等名 第16回NINJALフォーラム「ここまで進んだ！ここまで分かった！多様な言語資源に基づく日本語研究」
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田真寛，横山晶子
２．発表標題 これからの消滅危機言語の保存研究における市民科学者の育成
３．学会等名 第43回NINJALチュートリアル
４．発表年 2022年

１．発表者名 Nobuko KIBE, Kohei NAKAZAWA, Akiko YOKOYAMA
２．発表標題 Grammatical Relations in Japonic
３．学会等名 The second meeting of the Academic Year 2020 of the Joint Research Project on “Studies in Asian and African Geolinguistics”（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 横山晶子
２．発表標題 北琉球沖永良部国頭方言の焦点標識
３．学会等名 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」オンライン研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Martha Tsutsui, Akiko Yokoyama, Madoka Hammine, Miho Zlazli
２．発表標題 Effects of Gender on Language Revitalisation & Documentation in the Ryukyus
３．学会等名 7th International Conference on Language Documentation & Conservation（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 横山晶子
２．発表標題 言語継承のアプローチに関する試論：マーケティング理論を参考に
３．学会等名 沖縄言語研究センター定例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 横山晶子
２．発表標題 自然談話において焦点呼応はいつ現れるか？ －琉球沖永良部国頭方言の場合－
３．学会等名 第161回日本言語学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 横山晶子
２．発表標題 オンライン調査 の活用例「Skypeによる方言調査」
３．学会等名 Covid-19の影響下における方言研究のあり方を模索するWS
４．発表年 2020年

１．発表者名 山田真寛
２．発表標題 子どもたちが大人になるときにも しまのことばが聞こえる世界を残すために：地域言語コンテンツの制作・利用を軸にした消滅危機言語の再活性化
３．学会等名 ICU Asian Forum（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計4件

1．著者名 松村　雪枝、田中　美保子、山本　史、横山　晶子	4．発行年 2022年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 44
3．書名 塩一升の運（ましゅ　いっしゅーぬ　くれー）	

1．著者名 野原　正子、山本　史、下地　賀代子	4．発行年 2021年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 40
3．書名 カンナマルクールクの神（カンナマルクールクぬ　かむ）	

1．著者名 仲間博之、田窪行則、岩嵜勝一、五十嵐陽介、中川奈津子	4．発行年 2022年
2．出版社 国立国語研究所 言語変異研究領域	5．総ページ数 428
3．書名 南琉球宮古語池間方言辞典	

1．著者名 山田真寛、森澤ケン	4．発行年 2021年
2．出版社 言語復興の港	5．総ページ数 18
3．書名 与那国の人とことば2020	

〔産業財産権〕

〔その他〕

言語復興の港
https://plrminato.wixsite.com/webminato
しまむに宝箱
https://www.erabumuni.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	岩崎　典子 (Iwasaki Noriko) (30836028)	南山大学・人文学部・教授 (33917)	
研究分担者	小嶋　賀代子（下地賀代子） (Kojima Kayoko) (40586517)	沖縄国際大学・総合文化学部・教授 (38001)	
研究分担者	横山　晶子 (Yokoyama Akiko) (40815312)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・特別研究員（RPD） (12603)	
研究分担者	中川　奈津子 (Nakagawa Natsuko) (50757870)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・研究系・准教授 (62618)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関